

D-1 道徳判断の発達段階に肉する研究 I-その1

日本女大家政 ○石井富美子 宇川和子 北川はるみ 望月登志子

目的 道徳性には、知的側面・情緒的側面・行動的側面があるが、本研究では知的（認知的）な道徳判断に焦点を絞った。そして、その道徳判断の発達過程を段階的に追求するために、Kohlberg, L.が見出した道徳判断の発達段階の妥当性を検証することを目的とする。従来、道徳判断の研究は、主に言語的教示が可能な中学生以上を対象に行われてきたが、本研究で就学前児を対象としたのは、道徳性の起源を明らかにするための試みである。その際、道徳性発達の規定要因のひとつである母親の道徳判断の発達段階との肉連についても実証的に検証する。Kohlberg, L.によれば、発達段階に肉するそれぞれの規準は、以下の通りである。I前慣習的レベル—才1段階（罰と服従への志向性）・才2段階（素朴な道具的相対主義） II慣習的レベル—才3段階（良い子への志向性）・才4段階（法と秩序への志向性） III自律的原則のレベル—才5段階（社会契約・法律尊重への志向性）・才6段階（普遍的な倫理原則への志向性）

方法 被験者：45才児27名とその母親 手続：5才児—20～30分ずつの個人面接を1人/回、絵とみせながら例話について判断を求め、その根拠をたずねる。この例話は、Kohlberg, L.が妥当性を認められた側面について設定した。母親—20～40分ずつの個人面接を1人/回、道徳判断を必要とする葛藤場面と例話を示し、いくつかの質問について判断を求める。この例話は、Kohlberg, L.が用いたものの中から、面接時間との肉連で3つの例話を選択した。質問項目はJarasuriaを参照した。